

自己肯定感を高め，思いやりの心を育てる指導の工夫

～自他のよさに気づき，認め合う対話を通して～



那覇市立大名小学校教諭

上原 学

目 次

I	テーマ設定の理由	13
II	研究目標	14
III	研究仮説	14
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	14
V	研究の内容	15
	1 思いやりの心を育むために	
	(1) 「思いやり」について	
	(2) 思いやりの心を育てるために	
	2 自己肯定感を高める指導の工夫	
	(1) 自己肯定感について	
	(2) 「自己肯定感」と「思いやりの心」の関係	
	(3) 指導の工夫	
	3 対話活動の工夫について	
	(1) 自己内対話と他者対話を取り入れた対話活動	
	(2) 自己内対話を深めるための道徳シートの工夫	
	(3) 他者対話を活発化させる付箋紙の活用	
VI	授業実践（第4学年）	19
	1 指導計画	
	2 授業仮説	
	3 本時の展開	
VII	結果と考察	20
	1 作業仮説1の検証	
	【結果】【考察】	
	2 作業仮説2の検証	
	【結果】【考察】	
VIII	研究の成果と課題	24
	1 成果	
	2 課題	
	《主な参考文献と資料》	

自己肯定感を高め、思いやりの心を育てる指導の工夫 ～自他のよさに気づき、認め合う対話を通して～

那覇市立大名小学校教諭 上原 学

I テーマ設定の理由

今日の少子高齢化や核家族化、情報化の進展など、社会環境の急速な変化は物質的な豊かさと相まって、価値観の多様化や人間関係の希薄化をもたらしている。子どもたちの意識や行動もその影響を受け、生命を大切にする心や他人を思いやる心、規範意識などが十分に育っていないことがよく指摘される。このような現状を踏まえると、豊かな心を育てる道徳教育の役割がますます重要になってくる。

現行の学習指導要領解説道徳編（以下、道徳編と略す）においては、「道徳は、自らを見つめ、自らに問いかけることから出発する。それは、外に表れている自己と内なる自己との対話を意味する。そのことを通して、より積極的に自己像を描き、自律的な人間が形成される。」と示されており、自己理解を育むことの必要性を表している。また、沖縄県学力向上主要施策「夢・にぬふあ星プランⅢ」では、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心」を重要視しており、本校教育目標の中でも「思いやりのある子」を育てると掲げられていることから、他者への思いやりの心を育むという他者理解が強調されている。以上のことから、思いやりのある豊かな心を育てるためには、自己理解・他者理解を共に深めていく道徳教育の在り方が必要となる。

本学年の児童は、少人数集団の中で成長してきており、幼い頃から兄弟のように関わってきている。そのため、慣れ合いからか、相手を傷つけてしまう言葉が頻繁に飛び交っている現状がある。その結果、心に不満を抱いたり、自信を失ったりすることが増え、自己を肯定的に捉えることができない児童がいる。その自己防衛策からか、相手を批判する言動や自己中心的な考え方・態度の児童も目に付く。このような状況を踏まえて、自己と他者との違いを理解し、互いに認め合うことのできる思いやりの心を育成することが重要であると考え。その手立てとして、道徳の時間に対話活動を取り入れてみる。自分の思いや考えを本音で話せるようにし、それが相手に伝わり、認められるという経験を通して、喜びや自信につながり、自己肯定感の高まりにつながるであろう。自己肯定感が高まってくると、友達の思いや考えも温かく受け入れようとする思いやりの心が育つと考える。

これまでの道徳の時間の実践を振り返ってみると、資料から登場人物の心情を読み取ることが中心であったり、教師のねらいとする価値に誘導する授業になりがちであった。また、善悪の判断や集団生活内の規範意識など、価値観の理解だけにとどまっており、友だちと意見を交流させ、道徳的価値観が深まり合う場の工夫が十分ではなかった。

そこで、本研究では児童相互の対話を通して多様な価値観に触れさせ、自他の違いに気づかせたい。その中で、自己肯定感を高めていき、お互いのよさを認め合うことで、思いやりの心が育つであろうと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

自己肯定感を高め、思いやりの心を育てるために、道徳の時間において「自他のよさに気づき、認め合うことができる対話活動」を研究する。

Ⅲ 研究仮説

1 基本仮説

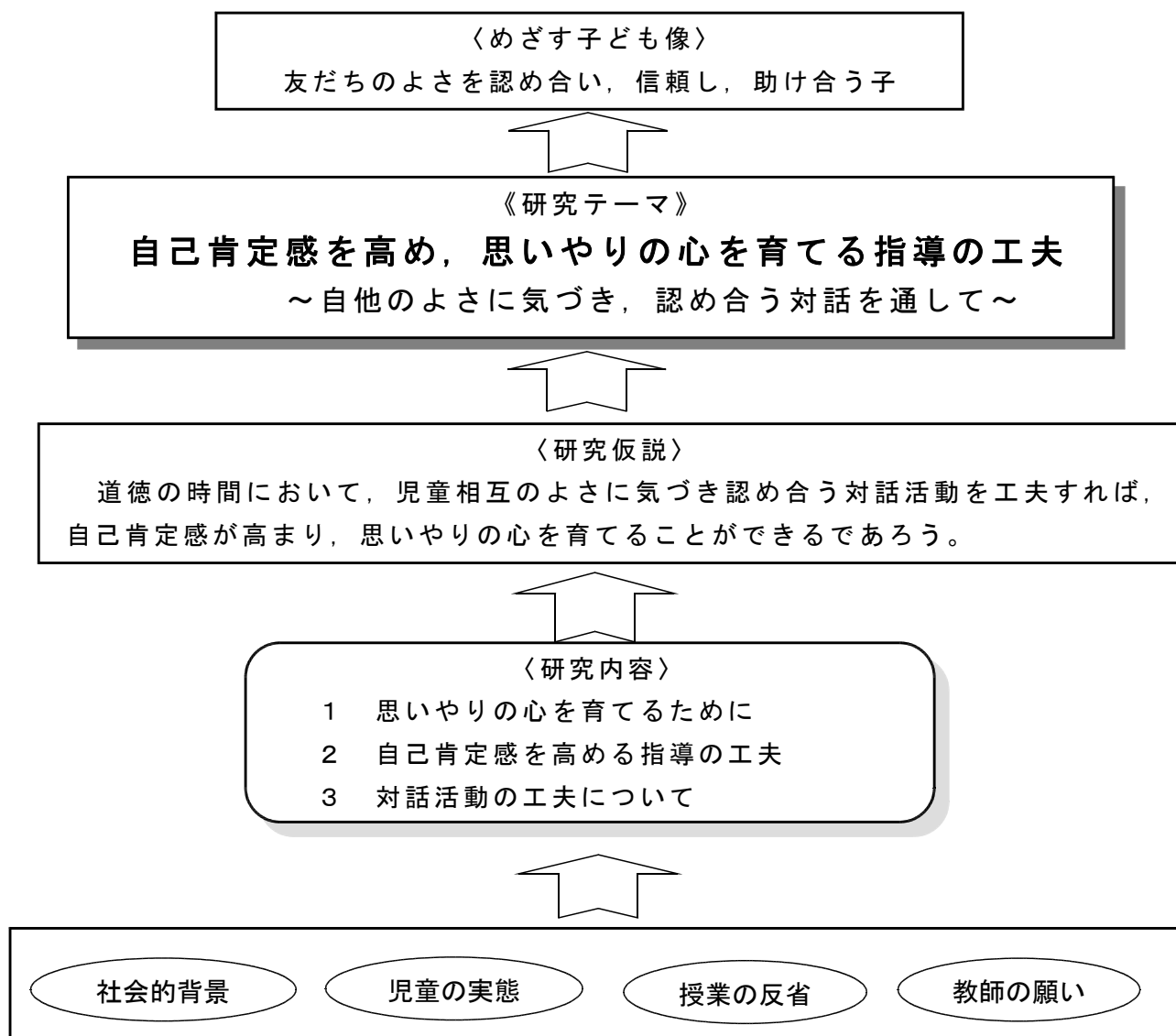
道徳の時間において、児童相互のよさに気づき認め合う対話活動を工夫すれば、自己肯定感が高まり、思いやりの心を育てることができるであろう。

2 作業仮説

(1) 対話活動の場において、付箋紙を活用してお互いのよさを伝え合えば、多様な考えを共有し、互いの共通点や違いに気づき、他者を好意的に認める心情が育つであろう。

(2) 自分の考えの変化を比較できる道徳シートを工夫すれば、自分をより深く見つめ直し、自己内対話を活性化させ、自己理解が深まるであろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容

1 思いやりの心を育てるために

(1) 「思いやり」について

道徳編において思いやりとは、「相手の立場を推し量り、自分の思いを相手に向けることである。」と述べている。そして、「それは具体的な行為として、温かく見守り接することや、相手の立場に立った励ましや援助などを含む親切な行為などとして表れることが期待される」とも示している。次に、押谷由夫(1995)は「思いやり」とは、人間関係の中で育まれるもので、「相手の心(気持ち)をおしはかりながら、共感的に心を通わせること。」と述べている。

これらのことから、思いやりとは相手とのかかわりの中で育まれていくものであるといえる。児童は、家庭・学校・地域などにおける様々な人間関係の中で、相手の立場を理解したり気持ちを考えたりする体験を通して、人間関係の基盤になる思いやりの心を身に付けていくのである。

(2) 学習指導要領の内容項目から

道徳編では、思いやりの心を育てるために児童の発達段階に即した内容項目及び具体的な指導を示しており、それを下記にまとめた。

	2「主として他の人とのかかわりに関すること。」
第一・二学年	(2)「 <u>幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。</u> 」 ・学校においては、多様な人との直接的なかかわり合いの機会を多くし、人間愛を根底とした思いやりや親切な行為の意義を実感できる機会をつくっていくことが重要である。この段階においては、身近な人に広く目を向け、温かい心で接し、親切にするものの大切さについて考えを深められるよう指導する必要がある。特に、身近にいる幼い人や高齢者との触れ合いの中で、相手のことを考え、優しく接し、具体的に親切な行為ができるようにすることが求められる。
第三・四学年	(2)「 <u>相手のことを思いやり、進んで親切にする。</u> 」 ・この段階においては、相手の気持ちをより深く理解できるようになるため、温かい心とともに、相手に対する思いやりの心を育てることが一層重要になる。相手の現状の状況、困っていること、大変な思いをしていることなどを想像することによって相手のことを考え、親切な行為を自ら進んで行うことができるように指導していくことが大切である。
第五・六学年	(2)「 <u>だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。</u> 」 ・この段階においては、特に相手の立場に立つことを強調する必要がある。どのように接し、対処することが相手のためになるのかをよく考えた言動が求められる。また、人間関係の深さの違いや意見の相違などを乗り越え、思いやりの心とそれが伴った親切な行為を、児童が接するすべての人に広げていく指導も大切である。そのためには、児童が多様な他者と触れ合い、助け合って何かをするような機会を増やすとともに、それらの体験を生かし、思いやりの心をもつことの大切さについて深く考えられるように工夫する必要がある。

以上のことから、思いやりの心を育てるためには、全学年で系統性をもった指導をしていくことが求められる。学校生活全体における様々な他者とのかかわりの場面で、相手の立場になって考え、判断し、行動することができるようにならなければならない。しかし、他者に目が向くようになるためには、学校生活の中で自分の存在意義を感じて自信を持ち、自分自身を大切に思いを持つことが前提になる。

そこで、思いやりの心を育てるためには自己肯定感を高めることが、まず必要であると考えられる。

2 自己肯定感を高める指導の工夫

(1) 自己肯定感について

自己肯定感とは、「自己自身の存在に対する認識として、自己の身体的な特徴や能力や性格などについて肯定的に考えたり、感じたりする感情をさす。」（「教育用語辞典」2011年）と定義されている。

アメリカの心理学者マズローは、子どもの「自己肯定感」を育てるためには、「所属と愛情の欲求」を満たすことが必要であると考えた。人間の欲求を図1のように示し、下位の欲求が満たされたときに上位の欲求を満たそうとすると述べている。つまり、「自己肯定感」にかかわる「自尊欲求」が生まれるためには、下位欲求である「所属と愛情の欲求」が満たされる必要がある。子ども

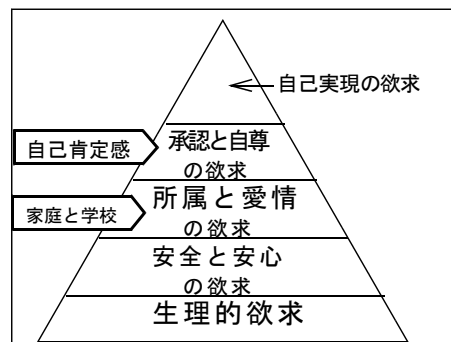


図1 マズローの欲求階層説(一部加筆)

が「所属と愛情」を感じる場としては、家庭と学校が大きな地位を占める。そこで本研究では、学級の所属感を高める授業実践を心がけたい。

中学年の時期は、感性や情操が発達して内省する心が芽生えるため、自分に対する自信を失いがちである。学年の発達段階を踏まえ、自分自身に対する自信やよさについて考える授業を通して、児童の「自己肯定感」を高めさせたい。

(2) 「自己肯定感」と「思いやりの心」の関係

児童は、自分が人から認められたり誰かの役に立てたりする喜びの経験を積み重ねていくことで、自己肯定感を高めていく。その喜びの経験によって生まれた自信を軸に、他者を意識する心の余裕ができるであろう。すると、相手の気持ちを考えたり思いやったりし、相手のよさに目を向け、自他共に認めていく気持ちが育っていく。つまり、自己肯定感が高まることで他者理解を深めようとする思いやりの心を育むことができるようになる。そして、思いやりの心が育まれることで、さらに他者から認められる経験が増え、ますます自己肯定感が高まるというように、「自己肯定感」と「思いやりの心」は図2のようにスパイラルな関係で向上していくと考えられる。

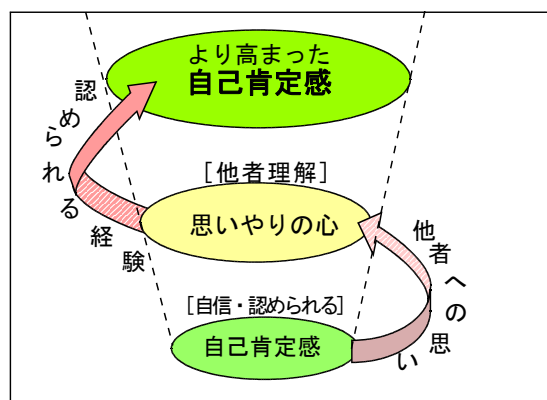


図2 「自己肯定感」と「思いやりの心」の関係

(3) 指導の工夫

学習指導要領では、「自分の考えを基に、書いたり話し合ったりするなどの表現する機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること」という事項が加えられた。しかし、1時間という学習の時間では、児童が自己の成長を実感することは難しい場合が多い。

そこで、道徳編においては、「学習を通して児童が何に気づいたり、何を理解したり、どのような考えや思いが深まったりするのかを予想して授業に臨むようにすることが重要になる。」と工夫のあり方を示しており、その例を下記のように挙げている。

- ① 学習を通して、はじめの段階と自分がどう変わったかが分かるような書く活動の工夫。
- ② 児童が想定したもう一人の自己に問い掛けて考えを深める自己内対話の工夫。

本研究では、こうした工夫の手立てとして、対話活動を取り入れる。他者や自己との対話を通して、児童が自分自身を振り返り、考えを深め、自らの成長を実感でき、自己を肯定的に捉えることができる指導の工夫を行う。

3 対話活動の工夫について

「対話」とは、「真理・真相を分け合い、分有することである。対話における他者への語りかけは、自己自身への問いかけや問い直しを含んで成立する。他者への語りかけ、他者からの語りかけが自己自身の中により深く豊かな思考を生み、自己自身で問い学び続ける主体を育てる。」（教育用語辞典）と示されている。また、佐藤学(1995)は、教室には「学習材との対話」、「他者との対話」、「自己内対話」の3つの対話が必要であると述べている。

本研究では、自己に問いかけたり、自己の変化に気づいたりする「自己内対話」と相手と話し合う「他者対話」を取り入れた対話活動を行う。

(1) 自己内対話と他者対話を取り入れた対話活動

自己内対話は、自己の価値観を明確にしたり自己理解を図ったりする上でも有効であると考えられる。自己内対話を取り入れることで、児童に自分自身の考えと向き合わせると同時に、道徳的価値の追求意欲を高め、その価値の自覚を深められる。

一方、他者対話は、自己の価値観と他者の価値観を比較したり、価値観の違いを認識したりすることができ、他者理解を深める上でも有効である。また、他者対話は自己内対話を深めることにもつながり、価値の内面化を図る上で重要である。

さらに、他者対話前の自己内対話Ⅰと他者対話後の自己内対話Ⅱを比較することにより、自己の価値観の変容に気づき、自らの成長を実感できることになる。このような対話活動における自他理解の関連を表したのが図3である。

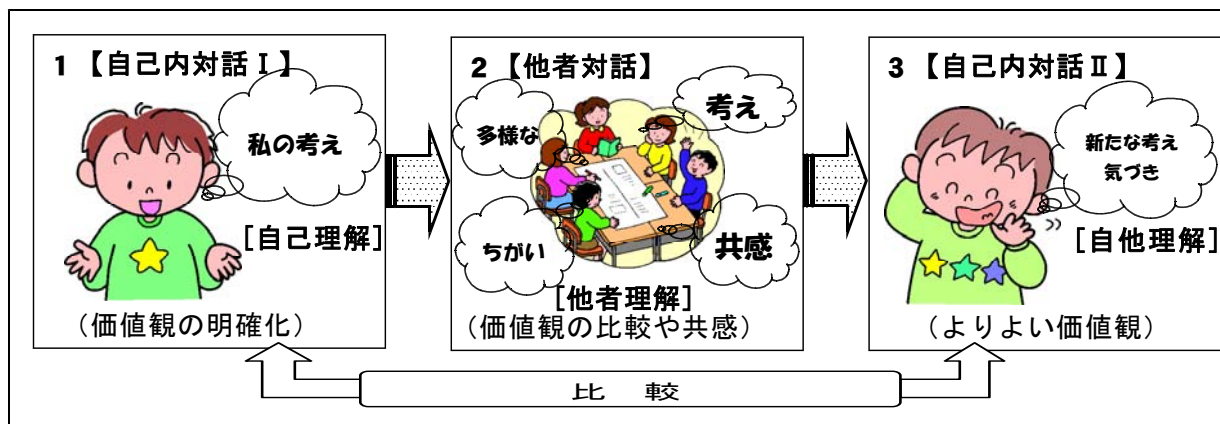


図3 自他を認め合う対話活動

(2) 自己内対話を深めるための道徳シートの工夫

児童は、書くことを通して考えを明確にし、自分の考えや気持ちを深めていく。書く活動は、児童がもう一人の自己に問い掛けて考えを深める自己内対話をするのに有効である。また、道徳編では「児童が自ら成長を実感できるようにする書く活動の工夫」の必要性を述べている。このことから、道徳シートを工夫して書く活動を行うことにより、児童は自己の考えや思いがどのように深まったかに気づき、自己の価値観の変容を認識することができるのではいかと考える。

本研究においては、自己内対話を深めることができる道徳シートを作成する。道徳シートには、図4で示したように、自己内対話ⅠとⅡを同じ形式にして記入させ、自己の価値観の変容が比較しやすいようにする。ここでは、児童が自己理解を深めるために、「心のバロメーター」を記入させる。これは、自己の心の全体を10とした場合、自分を肯定的に感じているかを数値で示すものである。

検証授業では、「自己内対話Ⅰ→他者対話（友だちのいいところ探し）→自己内対話Ⅱ」の過程をたどる。肯定感の数値変化を客観的に見ることで、自己の価値観を明確にし、自己内対話を深めることにつながるものと考えられる。

道徳シートの活用は、児童が自己の価値観の変容に気づくという良さだけでなく、教師側においても、記入された言葉などから個々の児童の価値観について把握することができる。その時間における児童の価値観の変容を見るにも有効である。

(3) 他者対話を活発化させる付箋紙の活用

他者対話を活発にするための方法として、付箋紙を活用する。まず、付箋紙に「友だちのよさ」について書かせる。書くことで、友だちへ思いを寄せ、自分の考えを明確にできる。また、伝え合うための準備ができるため、児童は安心して話し合いに臨める。

次に、グループ内で「友だちのよさ」について伝え合う。事前に付箋紙に自己の考えを書かせたので、それを元に全員が発言することができ、児童は発言できた満足感を味わうことができる。さらに、友だちの考えを聞くことで、共感したり、違う考えがあることに気づかされたりする。このことは、自己の考えを深め、グループ内の友だちを理解することにつながる。

最後に付箋紙の移動できる特徴を活かし、友だちに書いてもらった「友だち（本人）のよさ」を個人の道徳シートに貼り付け、友だちの思いを確認しながら、自己内対話Ⅱに取り組むことができる。児童は自分のよさを認められた喜びを味わうことで自信を持ち、自己肯定感を高められる。

このように、付箋紙を用いて他者対話を行うことは、自他の価値観を確認したり、比較したりすることができ、多様な価値観に触れることに効果的であると考えられる。

自己内対話Ⅰ

[自分のことが好き]
(心のバロメーター)

0 10

自己内対話Ⅱ

[自分のことが好き]
(心のバロメーター)

0 10

図4 心のバロメーター

VI 授業実践（第4学年）

1 指導計画

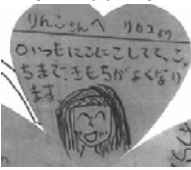

第一時	①主題名：気持ちを伝える3つの方法 ②資料名：「しずかちゃんになろう」 ③ねらい：攻撃的な表現，非主張的な表現，アサーティブな表現の違いについて気づかせる。
第二時	①主題名：友だちのよさを見つけよう 2-(2)思いやり ②資料名：「海田君もいい感じ！」－わたしたちのVサイン－（日本標準） ③ねらい：相手のことを思いやり，よりよい関係を築こうとする心情と態度を育てる。
第三時	①主題名：友だちのよさを見つけよう 2-(3)友達理解 《本時》 ②ねらい：相手のよさに気づき，互いに理解し合える関係を築こうとする心情と態度を育てる。




※検証授業は4学年2クラス(42名)を対象に実施した。

2 授業仮説

- (1) 友達のよさを付箋紙を活用して伝え合えば，友達のよさを共有でき，さらに，よさを活かすための対話が深まれば，友達相互で好意的に認め合うであろう。
- (2) 友達からよさを認められることで，「心のバロメーター」に変化が表れ，自己との対話も深まり，自分を肯定的に捉えることができるであろう。

3 本時の展開

段階	学習活動	主な発問	予想される児童の反応や発言	◆指導上の留意点 □評価
導入 5分	1 資料を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・海田君はどう変わったか。 ・周りの友達は海田君のよさを認めることでどうなったか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いてきた。 ・自信を持った。 ・喜びになった。 ・嬉しかった。 	◆友達から認められたときや，友達を認めたときの気持ちを振り返る。
前 展 段 10 分	2 「友達のいいところ探し」をする。付箋紙に書く。 	友達のよさについて考えよう ○友達のよさを見つけてみよう。 ・自分のよさも見つけてみよう。 ・付箋紙の書き方の例を説明	<ul style="list-style-type: none"> ・ドッジボールが上手 ・親切でやさしい ・足が速い 	◆よさの視点を与える。得意，行動，態度，性格，表情など。 ◆書けない児童への手立て，学校生活の様子を掲示する。 ◆書く時間を十分に取る。(1人2分×4人で8分程度)
		授業仮説① 友達のよさを付箋紙を活用して伝え合えば，友達のよさを共有でき，さらに，よさを活かすための対話が深まれば，友達相互で好意的に認め合うであろう。		

開 段 25 分	3対話を行う 「ニコニコ大作戦！」	◎グループで友達のいいところを出し合い、自信や喜びにつながる話し合いをしましょう。	・友達のよさについて発表し合い、付箋紙を利用して共通点や違いに気づき、友達理解を深める。	◆話し合いができていますか机間指導をして確認し、声を掛ける。 □対話を通して、友達のよさに気づき、認め合うことができたか。 ・1人3分程度で4人(12分)	
	・発表グループから1人発表してもらう。	<div data-bbox="347 488 1066 674" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[話し合いが深まり、広がる視点として]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達のよさを出し合い、共通点や違いを確認する。 ・友達のよさをどのように活かすと、自信が持てるか。 ・友達が自信を持つことで、周りの友達はどのような喜びがあるのか。 </div> <div data-bbox="507 674 979 904" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>をすすぐ、本人の自信にもなるし、周りの友達もうれしく思っている。</p> <p>だから、</p> <p>です。</p> <p>さんのお話は、</p> <p>ニコさんニコ大作戦</p> </div> 			
	4自分の気持ち確かめる。 ・「心のバロメーター」	<div data-bbox="571 943 1331 1066" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>授業仮説② 友達からよさを認められることで、「心のバロメーター」に変化が表れ、自分を肯定的に捉えることができるであろう。</p> </div>	○友達から認められた気持ちを書いてみよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のよさが分かって嬉しかった。 ・バロメーターの目盛りが増えた。 	□自分のよさに気づき、肯定的な考えを持てたか。
	 <p>[自分のことが好き] (心のバロメーター)</p>	○学習の感想を書いてみよう。	・友達のよさを見つけたり、伝え合っただう思ったのか。		◆相手を大切に、理解しようとする態度が大切である。
終 末 5 分	6学習のまとめをする。 ・教師の説話	○学習の感想を書いてみよう。 ・友達や人と関わっていく時に大事にしないといけないことは何か。			

VII 結果と考察

1 作業仮説1の検証

対話活動の場において、付箋紙を活用してお互いのよさを伝え合えば、多様な考えを共有し、互いの共通点や違いに気づき、他者を好意的に認める心情が育つであろう。

【結果】

(1) 付箋紙の有効性について

検証授業では、対話活動を道徳シートと付箋紙を用いて行った。児童は自分の考

えを付箋紙に書くことで、考えを明確にし、相手に伝える準備ができた。グループでは付箋紙に書いた各自の意見を持ち寄り、自分と友達の考えを共有することができた。また、授業後に付箋紙を使った話し合いについてアンケートを行った。図5は「付箋紙を使うと、自分の考えを伝えやすいですか」の結果で、83% (35人)が「思う」「少し思う」と答えている。次に図6の「付箋紙を使うと友達の考えを聞きやすい（理解しやすい）ですか」の結果では、90% (38人)が「思う」「少し思う」と答えている。

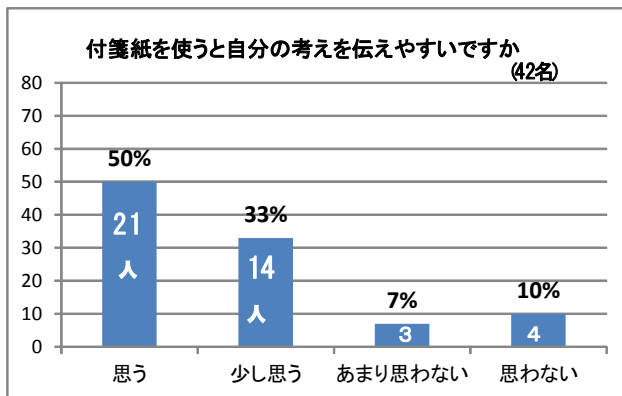


図5 付箋紙活用事後アンケート

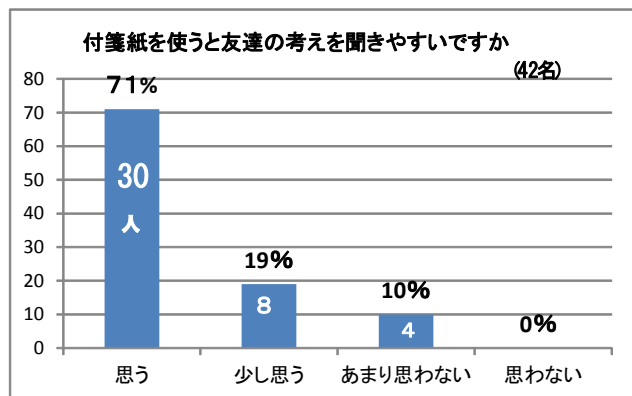


図6 付箋紙活用事後アンケート

図7は、付箋紙を使った話し合い活動の感想である。伝える立場としては、「ちゃんと伝えられた」、「すぐにわかるからべんり」「言いたいことも、わすれない」という感想があった。聞き取る立場としては、「何回も見て思い出しやすいかった」、「もらってゆうきにつながった」という感想であった。一方、◇印のように、自分が言いたいことがあまり書けないから、付箋紙を使わない話し合いの方が言いやすい、という感想もあった。

- 自分の考えをちゃんと伝えられたのでよかったです。
- 友だちの意見や、自分の意見をすぐにわかるからべんりだった。
- ふせんしを使うことで、言いたいことも、わすれないし、書くことで、何回も見て思い出しやすいかったです。
- ふせんしに書いたほうが友達とかにつたえやすかったです。
- 人から自分のよさをふせんしにかいてもらうと、ゆうきにつながった。
- ◇付箋紙を使う時は、あまり自分が言いたいことが書けないから、話し合いのほうが言いやすい。

図7 付箋紙を使った話し合いの感想

(2) 付箋紙を活用した対話活動の深まり

授業では、友達のよさを記入した付箋紙を使い、「友達のよさを活かし、本人の自信につながる」ための対話活動を行った。図8は、児童Aについてのを付箋紙を通して確認している様子である。

図9は、児童Aに対して児童B、C、Dとそれぞれが児童Aのよさについて出し合ったものである。同時に、本人にも自分のよさを書かせた。



図8 対話活動の様子

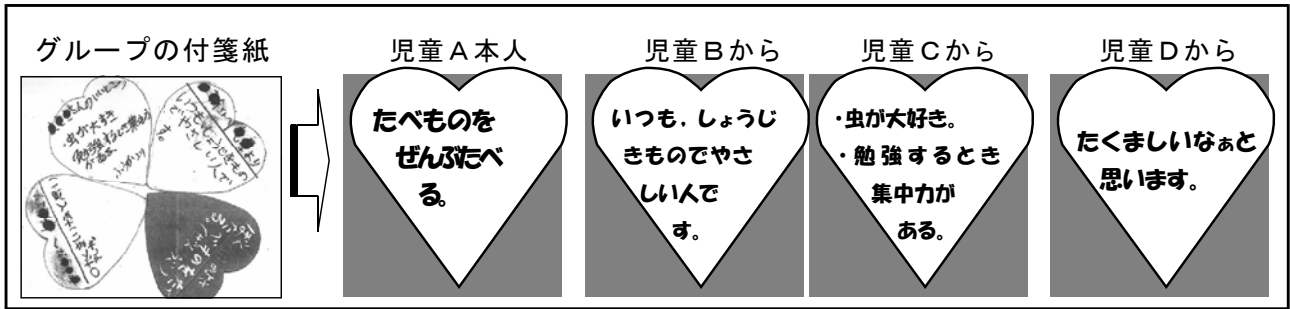


図9 友達のよさを記入した「ハート型」の付箋紙

図10は対話を通して、児童Aのよさをどのように活かすと本人の自信につながるかを話し合った際の道徳シートである。まず、4人の児童が出し合った付箋紙の中で、児童Aのよさを最もよく表しているものを選んだ。グループでは、児童Bの「いつも、しょうじきもので、やさしいところ」を採用している。次に、そのよさを活かすためにはどうしたらいいかを話し合わせたところ、「人助けボランティアリーダーをすると、本人の自信にもなるし、周りの友達もうれしいと思う。」という、アドバイスをまとめる対話を行った。

図11のグラフは「友達のよさを見つかったり、話し合うことで友達を思う気持ちは高まりましたか」のアンケート結果で、93% (39人)が高まったと答えている。

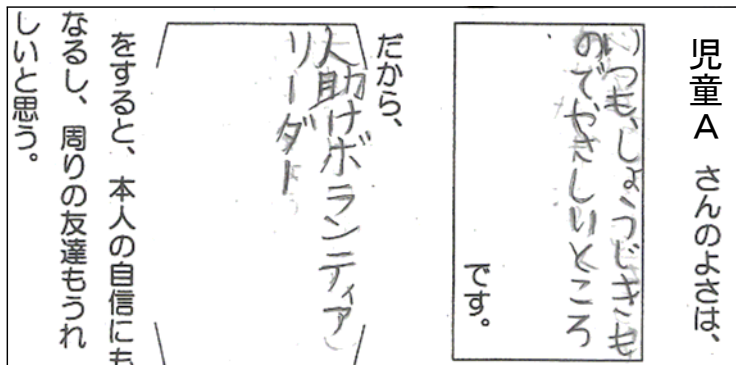


図10 対話活動が深まった道徳シート

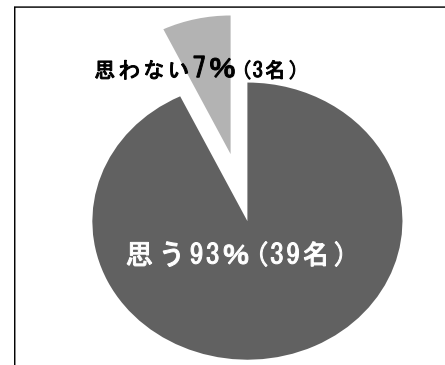


図11 友達を思う気持ち

【考察】

付箋紙を持ち寄ったグループ対話では、8割以上の児童が「付箋紙を使うと相手に伝えやすかった、聞きやすかった」と答えており、自分の考えをきちんと伝えられた喜びや、自分のよさを認めてもらった満足感を味わっている。このことから、友だちのよさを伝え合う場で付箋紙を活用することは、対話活動を進める上で効果的であったといえる。

次に、図10の道徳シートから対話活動を通して、友達のよさを好意的に認め、発展させていく心情が読み取れる。また、図11のアンケートの結果からも、他者を思う気持ちが高まったといえる。これらのことから、友達のよさを伝え合う対話活動で付箋紙を活用することは、多様な考えを共有し、互いの共通点や違いに気づいて、他者を好意的に認める心情が育つのに有効であると考えられる。

さらに、よさを伝えられた児童Aの感想に「ぼくにも、こんなにいいところがあるのわかりました。楽しかったです。」と書かれており、他者から認められた喜びを表し、自己を肯定的に受け入れることができたと思われる。

2 作業仮説2の検証

自分の考えの変化を比較できる道德シートを工夫すれば、自分をより深く見つめ直し、自己内対話を活性化させ、自己理解が深まるであろう。

【結果】

道德シートの自己内対話ⅠとⅡのバロメーターの変化を集計してみると、図12のようになった。「自分のことが好き」という気持ちの数値が自己内対話ⅠよりもⅡの方が高くなっており、バロメーターの数値が上がった児童は、88% (36人) となった。また、バロメーターの最高数値10目盛りの児童が8名から28名と増加した。

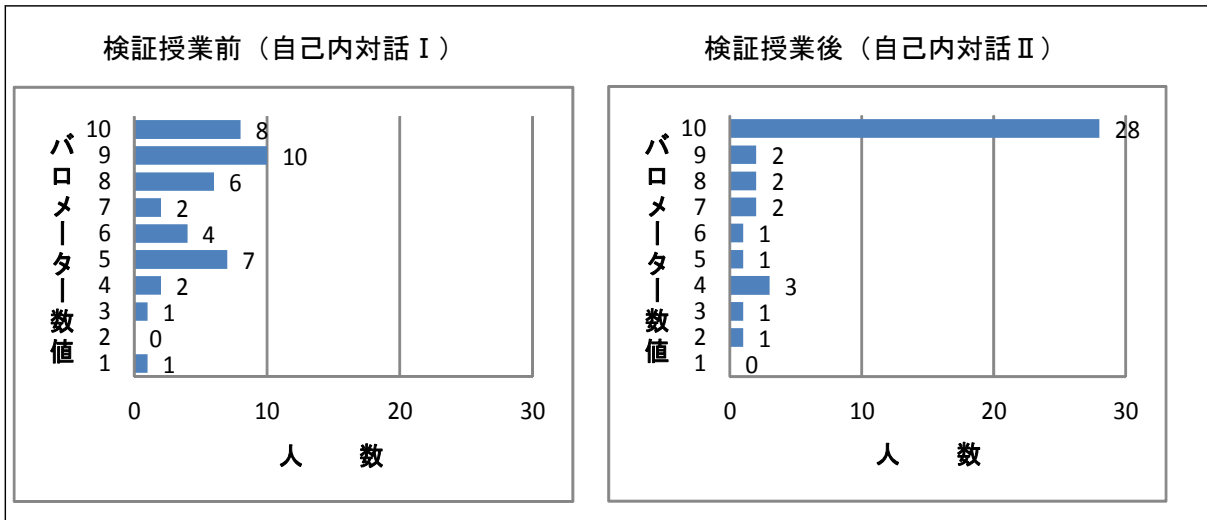


図12 心のバロメーター学年集計 「自分のことが好き」 (4学年41名)

図13は2人の児童の道德シート「心のバロメーター」である。児童Eの自己内対話Ⅰでは、6目盛りであったバロメーターがグループ対話活動後には、10目盛りを超えた数値を表している。友達からよさを認められた感想には、「人にほめられるとうれしい。いいきもち。」と嬉しさを表現している。また、児童Fは事前アンケートで自己肯定感が低い児童であった。そのため、バロメーターの数値は1目盛りだったが、対話活動後には1目盛り増えている。感想の記述では、「野球のことをほめられて、がんばろうと思いました。」と書かれている。

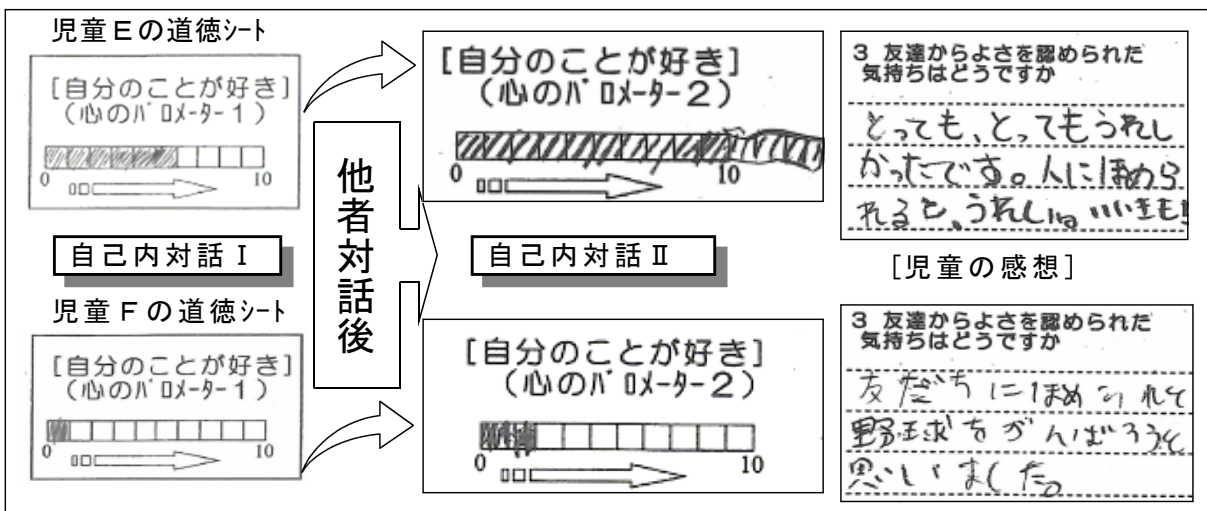


図13 自分の考えの変容を比較できる道德シート

【考察】

図13の児童Eは、翌日の日記に「人をほめること、ほめられること、1つ1つに思いがこめられており、…とってもうれしいことだと思いました」と書いてきた。本人のよさを認めてもらったこと、友達のよさを見つけ伝えたことに、満足感や喜びを味わっている。一方、事前アンケートで自己肯定感が低かった児童Fは自分のよさを付箋紙に書けずに対話活動を行っていたが、グループの友達から野球の上手さや一生懸命取り組むよさを伝えられることで、バロメーターの数値が1つ増加した。わずか1目盛りの変化だが、本人の中では、大きな自信や勇気につながったと思われる。

検証授業後の感想図14を見ると、対話活動を通して、○印のように自分のよさに改めて気づき、自己を肯定的に受け入れていることがわかる。また、□印からは、友達の気持ちに気づき、他者を理解することができたこ

- | |
|--|
| ○ <u>ぼくにも、こんなにいいところがあるのがわかりました。</u> |
| ○ <u>こんなに、自分のいいところがあるんだな</u> と思った。 |
| ○ <u>自分が、友達からみとめられうれしかったです。</u> 相手のよさとかがわかって、自信もついたのでよかったです。 |
| □ <u>自分が友達からほめられたり、ほめて友達の気持ちがわかりました。</u> |
| ◇ <u>これからも、いっぱいの人に、やさしくして、たくさんの方がえがおになるようなことをしたい</u> と思いました。 |
| ◇ <u>グループのみんなにダンスが上手とほめられたので、これからもがんばりたい</u> と思いました。 |

図14 児童の感想（下線は自己の変容の気づき）

とがわかる。そして、◇印の感想では、自己肯定感が高まったことで、他者への思いやりの心や自己のさらなる目標が記述されており、自分の考えの変化に気づきながら自己や他者を肯定的に認めていることが分かる。

以上のことから、自己の考えの変化を比較できる道德シートの活用しながら、他者対話、自己内対話を行うことで、児童が自己をより深く見つめ直し、自己理解を図ることにつながったと考える。

Ⅷ 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 互いのよさを付箋紙を活用して伝え合うことにより、多様な価値観に触れながら対話が深まり、自他のよさを認め合う、思いやりの心を高めることができた。
- (2) 道德シートの工夫により、自己内対話が深まり、自己の考えの変化に気づきながら自己を肯定的に認める姿が見られた。

2 課題

- (1) 思いやりの心を育て、実践力につなげる総合単元的な道德学習計画の作成。
- (2) 道德的価値を深めさせる対話活動の工夫。

《主な参考文献と資料》

『小学校学習指導要領解説 道德編』 文部科学省 東洋館出版 2008

『「よさ」をはぐくむ道德の時間』 押谷由夫 著 明治図書 1996

『ほんものの「自己肯定感」を育てる道德授業』 諸富祥彦 編 明治図書 2011

『沖縄県立総合教育センター第48集 研究集録』 2010